

フルオープンソースが可能にした 70万件の血統情報へのアクセス オフィシャルサービスの信頼性を実証

Zend

競走馬に関わる人にとって、馬の血統や繁殖についての情報は欠かせないもの。そうした情報を管理し、軽種馬(競走馬)が一生を終えるまでに必要な各種登録業務を行うのが、財団法人日本軽種馬登録協会(以下、「協会」)だ。業務内容は、軽種馬の登録に始まり、登録証明書の発行、繁殖情報に関する統計業務、さらに血統書等の関連書籍の発行など。1923年の社団法人帝国競馬協会の発足から現在に至るまで、さまざまな業務を通じて、日本の競馬産業の発展に大きく貢献してきた。このたび兼ねてから検討課題であった血統書データベースのインターネット公開がようやく実現、新たなファン層を開拓するなど思わぬ効果もありシステム全体の評価は高い。



情報システム部 部長
岩元 正文氏



情報システム部
羽部 勉氏

Webベースのシステム構築で 血統情報へのアクセスが容易に

血統書の発行は、協会の事業の大きな柱の一つである。最大の情報量を持つサラブレッド血統書については、1941年の第1巻発刊より、03年までの70年間にわたり計19巻が出版された。これは、一冊1,500ページに及ぶ、膨大な情報量を含むものだ。生産者や競馬関係者にとっては、これまで軽種馬の血統に関する唯一の情報源だった。ところが、扱いに慣れない利用者にとっては、そこから目的の馬の情報を見つけ出すのは容易ではない。年配の利用者の中には、紙の媒体が持つ質感を好む利用者もいるが、情報へのアクセスの容易さという点からは改善の余地があった。今回の「インターネット血統書サービス」は、その名の通り軽種馬の血統書データをインターネット上で公開することで、紙媒体から血統情報を取得する不便さを改善するものだ。データベースに

は軽種馬の繁殖成績をはじめ、輸出入情報や5世代の血統情報など、70万件を超える情報が盛り込まれている。毎年の新規追加分は約3万件だ。もちろん、登録情報の検索機能も装備している。また、万一のトラブルを防ぐため、プログラム内容はZend Encoderによって暗号化する仕組みを採用。さらにコンテンツデータの盗用防止策として画面キャプチャやプリントアウトができないようコンテンツ保護対策をも講じている。

コスト対策への入念な検証を経て 調査開始から5年目で悲願のシステム化

そもそも業界内で血統情報をインターネット化する案が持ち上がったのは、95年のこと。イギリスで開催された、サラブレッドの定義を定める国際血統書委員会でのワーキングパーティの設置がきっかけだった。国内では、インターネットの普及を受け、早速協会が研究をスタート。00年には調査に着手するものの、すぐにコストの壁

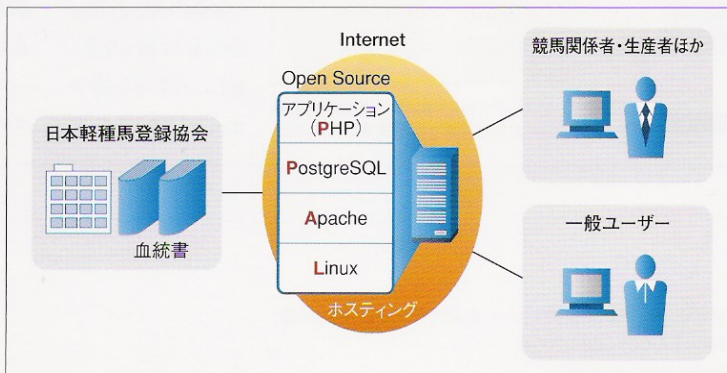
にぶつかった。システム構築や運用にかかる総コストを考えると、まだまだネット化は現実的ではなかった。その後、とくに進展のないまま歳月は過ぎ、結局、プロジェクトの発足は、調査開始から4年後の04年4月となった。IT環境の急速な発展が、計画実施の前進に大きく影響したことは間違いない。そのひとつに当初より利用を考えていたホスティングサービスがあげられる。24時間365日、安定的にシステムを稼働させる環境を自前で用意する必要がない。ホスティングサービスならコスト面や管理面で最適なサービスを選択できるメリットがある。そしてもうひとつはオープンソースによるシステム構築や運用実績も増えWebシステムの選択肢はかなり広がっていた。商用システムに比べオープンソースを利用すればイニシャルコストは低く抑えられる。公共機関である協会としても、出来るならばオープンソースによるシステム化を推進したいところである。情報システム部長の岩元正文氏は、導入の経緯を次のように説明する。「オープンソースでやろうという案が出たのは04年のことです。ホスティングサービスの選択肢も増え、紙(血統書)よりも低コストで運営できる見通しがつきました。3月頃、協会内で正式に導入の方向が決まり、プロジェクトが立ち上がったのは4月です。私ども、4月から9月までは全国の牧場への審査の時期にあたり、この期

導入システム

Server OS
Red Hat Enterprise Linux

DataBase
PostgreSQL

開発環境
PHP
Zend Encoder



間は要員の調整がつかえません。11月頃にベンダーに声を掛けて、実際に競争入札が始まったのが12月頃。昨年暮れにぎりぎり決まったという流れです。

RFPへの準拠と低コストが決め手 短期期でも入念な確認作業を

今回の入札に参加した企業は7社。協会側から最後に応札依頼を受けたのは、オープンソースジャパン(OSJ)だった。「入札で重視したのは、RFP(提案依頼書)の内容がきちんと反映されているかです。OSJ以外にもう一社、提案内容で優れた企業もありましたが、そちらは価格がかなり高かったのです」(岩元氏)。こうして最終的にOSJが選定されたのだが、提示された納入期限は3カ月後の05年3月末とかなり短かった。岩元氏自身、「かなりきつかっただろう」と振り返るものの、前述のように4月以降は牧場での審査が始まるため、協会側で担当要員を配置できない事情があったのだ。短期間でカットオーバーさせるための制作プロセスについて情報システム部の羽部 勉氏は次のように語る。「プロトタイプを作り、毎週2回のペースで、その内容をプロジェクトで投影しながら、その場で逐一確認し合い、修正を入れさせていただき

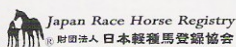
ました。プロトタイプは出来上がりイメージで確認できるので、想像していたものとの違いにすぐに気づきます。当初予定より若干カットオーバーが遅れましたが、システム開発力や生産性については満足しています」。そしてシステム構築と並行して大変な作業だったのが、70万件のデータ移行作業だった。「オフコンからPostgreSQLへのデータ移行処理が必要で、プログラムはもちろんオープンソースで作っていただきました。実際には、まず一部のデータで移行テストを実施し、各フィールドのデータ内容に抜け落ちがないか、確実にチェックしました。その上で70万件全データを移します。この移行の中でも特に日本語文字の変換は大変で、目視によって紙上のデータと照合し、当方とOSJさんの4、5人で、丸3日間を費やす作業になりました」(羽部氏)。

新たなファン層の拡大に貢献 コストパフォーマンスの良い オープンソースに今後も期待

カットオーバーは05年の5月25日。インターネット化の効果は明らかだった。すべてをオープンソースで構築したため、イニシャルコストは開発費用のみだ。70万件におよぶデータ移行もオープンソースプログラムによる処

理にこだわった。ホスティングサービスによって、ランニングコストもかなり抑えられているという。「今まで紙にかかっていたコストがなくなるので、当然、その分は安くなる。紙にこだわりを持つオールドファンの支

持はありましたが、事業はずっと赤字でした。それがようやく今、黒字になりつつあるところですよ」(岩元氏)。これには、新ユーザーの増加が寄与した。4月から6月にかけて、仮想の馬主となり、獲得賞金を争う競馬ゲーム『POG』(Paper Owner Game)が始まり、新たなファン層のアクセスが見られた。種牡馬別の産駒リストや、いわゆるマル外(外国産馬)の輸入状況をチェックするという。「紙の媒体でそれに対応しようとしても、年に1回の発行だから古いデータになる。新たな利用者を開拓でき、競馬産業の発展に少しでも貢献できたという点では、良かったと思います」と岩元氏。ユーザーの世代構成を見ても、以前は壮年層中心であったものが、30代が増え若返りしているという結果に。また、馬名登録申請時の事前調査などもオープンソースでシステム化し活用していく予定だ。ちなみに今のところサイトの利用は、06年2月まで無償とされている。こうした、協会側とOSJの二人三脚での取り組みは、協会の業務効率化を実現したのに加え、地方競馬場の相次ぐ閉鎖により、低迷する競馬産業にも活力を与えそう。さらに公共機関がオープンソースシステムの導入で、着実な成果を得たという事実は、オープンソース普及にも少なからず貢献した。紙からWebへ、データベースの移行をお考えの方にも朗報だろう。最後に、岩元氏は事業の効率化に対する意欲を語ってくれた。「公益法人ということで、赤字の事業には常にチェックが入ります。利益に臨むスタンスは難しいですが、事業の効率化や低迷を食い止められるようがんばりたい。今後もオープンソースを活用して低コストで高品質のシステム化を実現していきたいですね」。



法人概要

社名:財団法人 日本軽種馬登録協会
 設立:1971年7月1日
 本部:東京都港区新橋4-5-4 日本中央競馬会新橋分館6F
 事業内容:軽種馬の登録、登録証明書の発行、繁殖情報に関する統計業務、血統書等の関連書籍の発行など
 URL:<http://www.studbook.jp/ja/>

血統書サービスにアクセスするには事前登録が必要ですが、メニューからさまざまな情報検索が可能です。



〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-7-1 有楽町電気ビル南館14階
 TEL 03-3284-7600 FAX 03-3284-7604
 E-Mail toiawase@opensource.co.jp
<http://www.opensource.co.jp/>